岩手大学震災復興推進レター

「岩手の復興と再生に」オール岩大パワーを

vol.41

発行者
国立大学法人
岩手大学
総務企画部総務広報課
〒020-8550
岩手県盛岡市上田3-18-8
TEL 019-621-6015
FAX 019-621-6014
E-mail kkoho@iwate-u.ac.jp

平成27年5月29日発行

http://www.iwate-u.ac.jp/koho/fukkouletter.shtml　岩手大学ホームページからもご覧いただけます。

被災地の高校生とコンソーシアム連携校の学生がともに学ぶワークショップを開催しました

平成27年3月15日、久慈市文化会館アンバーホールで、平成26年度2回目となる被災地の高校生といわて高等教育コンソーシアム連携校の学生がともに学ぶワークショップが開催されました。

このワークショップは、次代を担う高校生と大学生が被災地（ふるさと）の復興について自らが考え、互いに刺激しあいながら学び、将来、地域を担う人材の育成を目的として毎年開催されているものです。

今回は、「強く光り輝くふるさと創り～人が減っても幸せに暮らせる街～」をテーマに、宮古高校（9名）、久慈東高校（13名）、久慈高校（16名）の総勢38名の高校生の皆さんと、コンソーシアム連携校の学生11名（岩手大学10名、盛岡大学1名）がともに活動しました。

参加者は、岩手県復興局復興推進課の菊池学推進協働担当課長から岩手県における復興の取組と現状についての説明を聞き、人口減少の加速が懸念される被災地で、幸せに暮らせる街を創造し実現するための具体的な方策についてグループ毎に活発な意見を交わしました。

8班に分かれてのグループワークでは、地域の「いいところ」と「厄介もの」が実は表裏一体であり、見方を変えればマイナスイメージの事柄も地域の魅力として発信できる可能性があるという視点を得ました。地域のシーズを活用し、理想の“ふるさと”を創り実現するための具体的な方策として、沿岸の自然や産業（=いいところ）に焦点をあてた沿岸ツアーの企画や、大雪（=厄介もの）で“かまくら”をつくり、その中で海鮮鍋を食す地元体験の企画など、多様なアイデアをグループ毎にまとめ、発表しました。

また、久慈地方を有名にした『“あまちゃん”からの脱却』という大人からは言い出しにくいタブーにも切り込むグループもありました。

講評では菊池課長から「今日出てきたアイデアは地域の資源を活かすものであり、それが復興や地域創生につながる。アイデアを共に出しどう実践するかを考えるというプロセスを参加者全員が共有できた事が大事。」とのお話を頂きました。最後に、進行役である岩手大学教育推進機構の脇野博教授が「ワークショップに参加する前と後では自分の考えが変わったのではないか。この経験は世の中に出て行く際に大きな力となる。得た考えと経験を自分の中で更に熟成させ、様々な立場の人々へ伝えて欲しい。」とまとめ、次代を担う若者同士が互いに刺激を受けながら、ふるさとの幸せな未来の創造について懸命に学び合う非常に有意義なワークショップとなりました。

ワークショップを進行する
岩手大学の脇野教授

グループワークの様子

アイデアの発表を行う参加者

岩渕学長が三陸沿岸自治体と意見交換を行いました

3月に新執行部となった岩手大学では、岩渕明学長、八代仁復興担当副学長・三陸復興推進機構長が岩手県三陸沿岸市町村復興期成同盟会加盟13市町村（洋野町、久慈市、野田村、普代村、田野畑村、岩泉町、宮古市、山田町、大槌町、釜石市、住田町、大船渡市、陸前高田市）をまわり、各市町村長と復興に関する意見交換を行いました。

岩渕学長は市町村毎に行っている岩手大学の復興支援活動を説明するとともに各市町村の要望等を伺いました。

また岩手大学では文部科学省の「地（知）の拠点形成事業」の一環として、昨年度から一年生全員が沿岸市町村を訪問する被災地学修に取り組んでおり、事業担当の八代副学長・三陸復興推進機構長からは、現地の受入や講師派遣に協力していただいている各市町村長に対して謝辞が述べられました。

各市町村長からは、「学生が地域に入って、学生目線で自由に活動して欲しい」、「岩手大学が進めている水産関連の学部コースの新設については、若者の地元定着率に貢献できるもので、すばらしい取り組みである」等の意見のほか、「自治体職員のスキルアップを目的とした学び直しの場として大学を活用したい」との意見もいただきました。

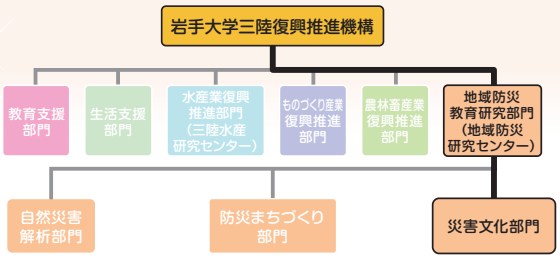
「地方創生」が重要なキーワードとなっている現在、岩手大学では三陸沿岸地域との産学官連携を一層加速するとともに、地域が求める人材養成を行い、三陸沿岸地域への就職率向上を目指していきます。

岩手大学の取り組みを説明する
岩渕明学長（右）と八代仁副学長（中央）

大船渡市の復興状況を説明する
戸田公明大船渡市長（中央）

岩手大学三陸復興プロジェクト

岩手大学では岩手大学三陸復興推進機構を設置し、地域の行政や住民、他大学、企業等と連携を図りながら、教職員・学生が一丸となって東日本大震災からの復興に取り組んでいます。今回は、女性たちによる手仕事の民族誌について調査を進めている地域防災教育研究部門の活動の一例をご紹介します。



被災地の復興プロセスを記録する ～女性たちによる手仕事の民族誌～

三陸復興推進機構地域防災教育研究部門災害文化部門
佐藤　悦子（地域防災研究センター　特任助教）

被災地の復興において、これまでも「コミュニティの再生」は重要な課題とされてきました。震災から4年が経過し、被災者の生活再建へのスピードが加速しつつある今、こうした課題への取り組みはより一層必要とされています。

一方で、これまでの復興過程において、被災した方々は、人とのつながりを再構築し、様々な活動を行ってきました。このような事を踏まえ、本研究では、被災地の復興過程において、どのように人々が関係性を再構築し、どのような実践を行っているのかを明らかにし、震災復興を総体的に描く「被災地の民族誌」として記録することを目的としています。

宮古市田老地区では、これまでに10の女性たちのグループが形成されました。震災前の地縁や宗教的共同体、避難所での共同生活集団、仮設団地での近所付き合いなど多様なつながりを基盤とした集まりです。

月2回、仮設団地内の集会所で活動する女性たち

その多くが、2011年秋以降、外からの支援をきっかけに、「○○の会」というようにグループ名を掲げ、集会所などでエコクラフトやさをり織り、手芸などの手仕事を実践しています。彼女たちは手仕事の楽しみを共有し、共に学び合いながら作品を作り上げています。こうした女性たちの手仕事の場において参与観察を行いながら、形式的インタビュー調査だけではなく、お茶飲み話などの非形式的なインタビュー調査を実施しています。このようなフィールドワークを通して、様々な苦労や葛藤を抱えつつ、ささやかな実践ながらも限られた資源を活用し、被災地を生きる主体的な女性たちの姿や知恵を浮き彫りにしようとしています。

これまで被災した女性たちが積極的に災害対応や防災、復興について発言できる機会は少なかったといえます。しかし、被災地に通い女性たちの語りに耳を傾けると、彼女たちの実践には被災地を生き抜くための教訓が埋め込まれているように思えてなりません。

今後も復興過程における被災者の実践について、その意味や社会的・文化的な文脈を含めた詳細な記録を目指し、調査を継続して行く予定です。

手仕事の合間に調査者とお茶飲み話をする

釜石サテライトだより

新緑が輝く、釜石が一番きれいな季節となり、釜石サテライトにも釜石湾からのさわやかな海風が吹く季節となりました。

釜石サテライトの設置から2年1ヶ月が過ぎ、釜石サテライト及び三陸水産研究センターにおける活動、研究等について更なる推進を図っているところです。

今年度が最終事業年度であるSANRIKU（三陸）水産研究教育拠点形成事業についても、三陸水産研究センターが主体的となりスタッフ一同、最終的なとりまとめを視野に入れながら取り組んでいます。

更には、平成28年度から設置される農学部食料生産環境学科水産システム学コースに関連した整備等についても進めることとなり、慌ただしい日々が続いております。

さて、水産システム学コースの設置に伴い、三陸水産研究センターに専任教員2名が配置されました。今回は、2名の教員をご紹介します。

田中　教幸（たなか　のりゆき）教授／三陸水産研究センター長

三陸水産研究センターの持続的漁業社会・地域論及び関連する分野を担当いたします。

専門分野：海洋化学、地球化学、地球環境科学、サスティナビリティ学

現在の研究内容：国際環境保全、持続的漁業社会及び持続的地域社会の研究

先生からのコメント

4月1日にセンター長として着任いたしました田中教幸です。

2011年3月11日の大震災からの復興を三陸沿岸地域の水産業の振興を通してお手伝いできる三陸水産研究センター創りを目指しています。

世界の水産業は新興国の旺盛な需要に支えられて成長を続けています。しかしながら、日本の水産業はややもすると斜陽産業化しているのが現状です。この現状を打破するには大変革を伴うイノベーションが必要であり、これなしでは真の三陸の水産業の復興もありえ無いと信じています。今までにはありえないような岩手大学の地域貢献のあり方をリスクを恐れず実践してまいります。また、失敗を恐れずに果敢に挑戦できる新しい高度水産専門家を育成してまいります。よろしくご指導、ご支援をお願いします。

塚越　英晴（つかごし　ひでは る）助教

三陸水産研究センターの漁業生産学（増養殖、水圏生物、水族ゲノム、水圏生態）及び関連する分野を担当いたします。

専門分野：漁業生産、水族ゲノム生物学、分子生態学

現在の研究内容：サケ類を中心とした水産魚介類の漁業生産に関する分子生態学的研究

先生からのコメント

前職は岩手大学三陸復興推進機構の特任研究員をしており、三陸水産研究センター設置当初から釜石を拠点として、サケ類を対象とした資源増殖に係わる分子生態学研究等を行ってきました。

「岩大が沿岸に来て良かった」と言ってもらえる研究教育機関を目指して、これからも三陸沿岸を対象とした研究教育活動に従事して行きます。

今後、様々なプロジェクトが展開される中で、現場窓口としてサポートさせていただきます。

連絡先　**岩手大学三陸復興推進機構釜石サテライト**
〒026-0001 岩手県釜石市平田第三地割75-1
TEL：0193-55-5691（代表）／FAX：0193-36-1610
E-mail：kamaishi@iwate-u.ac.jp
URL：http://www.iwate-u.ac.jp/reconstruct/kamaishi/